

# 原告団

遺族・CO裁  
判、災害責任  
追及、特集号  
第百九十四号

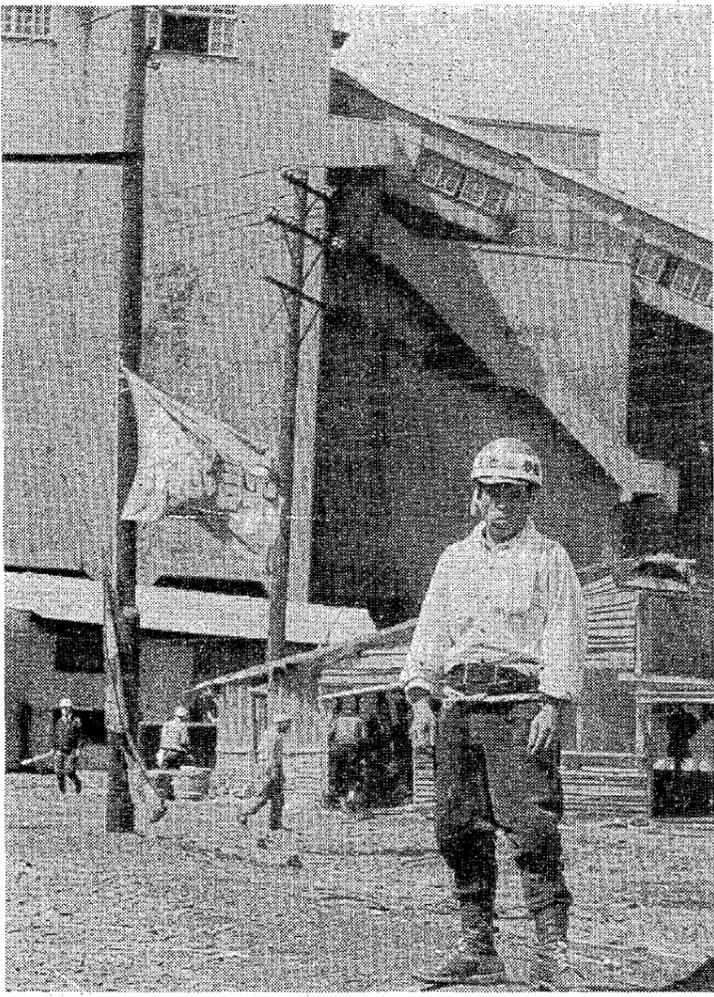
## 原告団レポート

### 遺族—— 野田 明好さん

#### 眼が見えぬ

晩秋。日の暮れるのを早く。新港社宅も奥まったところ。堤防の近く。住んでいる人も少なく、明りも少なく暗い。荒れ果てたままの棟が連なり、雑草がおい茂り、かつての新港社宅を知る人

「以前に比べると、この辺りも淋しくなりましたね」と聞く。と「前うしろ二軒ですもんね。前会長を勤めていた溝口生松さんは、家は、ガスで(昭和四十二年の抗内火災で被災)やられて、去年、三十七歳で亡くなったとすよ。十八年、裁判提訴からでも八年半



ホットパー、総評の旗、ビニール小屋を背景に動員に加わった野田陵さん。当時、三池・安保の闘いはますます高揚の時期を迎えていた。

#### 幼い子供と

遺族の多くが年老いてきた。この日取材に同行願った、遺族会の

## 白内障と足の衰えが

### 死んだもんが一番きつつか、残った者も

#### なぜ裁判がさばけないのか

を透過して、さまざまな生きざまとともに、心の苦勞はもとより、肉体的にも大きな負担を背負いながら生きている。

「死んだもんがいちばんきつつか。残ったもんもきつつか。こんな情ないことがあつてしょうか」「なしてこまか子を置いて早よう近つたつな」といふも思いよりました。

よく聞かぬ喉から涙が流れる。その涙が苦勞を物語っている。そのひびひびと語る時、二人の言葉を聞きながら、二人の子供はまだ幼かった。

二人の子供はまた幼かった。長女の文代(ふみ)さんが小学六年生(昭和二十六年生まれ)、長男の等(ひとし)さんが三年生(二十九年生まれ)。もっと小さな子供を抱えた遺族もいたろう

が、三人だけの生活。朝ごはんを食べさせ、せかせかながら学校へやり、仕事に(爆発後誘致された縫製工場)行くのには食べる暇がなかったことも再三あった。

九年から四十五年まで勤めたあと家事に専念することになるが、文

代さんは大牟田南高校を卒業後、姫路の東芝に勤め、よき相手と結婚。現在は八代に住み、男児五歳、女児三歳の母親である。



残された日記帳。開かれたページの左は三池闘争中のもので、右は11月8日で終り、あとは空白。

争議の早期解決に乗り出す……」とある。まじめ人間の彼は、ホットパーに近い新港社宅というところもあって、ほとんども家に入ることなかった。

#### 一周忌の日

昭和三十八年十一月九日、明好さんは実父の一周忌のために湯増永の表家にいた。災害を午後五時のニュースで知る。隣さんが昇坑後実家に来ることになっていたのに、約束を違えることはいらないながら待っていた頃で、急に不安がつり、子供たちと家に帰る。すぐ組合に行き安全を確かめるが不明。兄弟たちと共に天領病院、宮浦、体育館とさがして歩き、三川支部(組合)に足を踏み入れたとたん、マイクで「野田たかし」と伝えるのを聞いた。

#### つるの怒り

昭和三十八年十一月八日、金雨、五時十八分起床(注・不明)沿層二十六御三片詰、フライアツシユ積、運搬。旧倉庫より新倉庫へ材料運搬。夜八時ごろより自転車で三川、登玉さん宅へ」

#### 残るノート

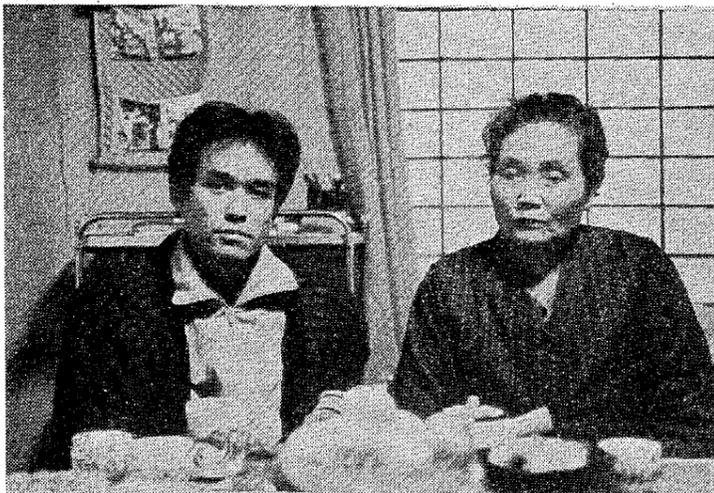
目を追って欠けることがない。パラパラとめくって、激しく聞いた三池闘争のまっただ中の昭和三十五年七月十九日を引く。

「火曜日、晴。本日よりピケ勤務の時間変更。朝六時五十分集合。本日より全員動員、緊急事態。朝、ピケについてからの作業。ザンゴ一掃り。午前八時すぎ警備に出動、執行吏来る。全員配置に着く。十時二十分ごろ警戒解除。中食。幕舎第十号機橋下。今晚ホッパ、下指令本部横にて映画会催す。今朝七時、ラジオ放送で座談会。う崎県知事、細谷市長が三池

#### まじめ人間

野田陵さんは瀬高の人で、大正八年一月七日生まれ。爆発に遭遇した時は四十四歳の働き盛り。

昭和十三年に万田鉦に入社、十九年に三川鉦へ。そして二十年にいったん退職している。この間の事情は定かでないが、二十三年にふたたび三川鉦に入社。仕繕工として勤め、爆発時の職種は通気であった。



新港社宅の自宅で、明好さんと等さん。